

浄土

1985-3

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回、五日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別扱承認雜誌）第三十五号
昭和六十年二月二十五日印刷 昭和六十年三月一日発行

第五十一卷

三月号



乙丑
不
身

川林



三月の秀句

春の野や匂ひ出でたる宵の月
門を出る人春光の包み去る
暖かや仏飯につく蠅一つ

庄司 瓦全
高浜 虚子
飯田 蛇笏



三月号



無量寿仏の身は、百千万億の夜摩天の閻浮檀金の色の如し。

——『観無量寿経』真身観文

目次

法 話

彼岸への道……………吉 川 哲 雄……(2)

「布哇通信」より

ハワイ開教史話……………鷺 見 定 信 ……(17)

《世相評談》

内の目、外の目……………丹 羽 演 誠……(12)

——大きい家小さい家——

寄 稿

法然上人のお言葉を拝して……………時 岡 秀 雄……(8)

インド古典文学の香り

クリシュナの物語(一)……………小 山 典 勇……(26)

＜読者のページ＞

私自身のこと(続)……………御堂河内 四市……(22)

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第9回 ……………寺 内 大 吉……(35)

前章・絶唱の経典 (九)

挿絵 松濤 達文

浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(32)

表紙 小林治郎 画

カット 大正大学美術部

(法)

(話)

彼岸への道



よし
かわ
てつ
ゆう
吉川哲雄

(東京・文京区伝通院住職)

今日彼岸菩提の種を蒔く日かな

お彼岸と云う言葉から受ける語感には私たち日本人にとり何か心に安らぎを与えてくれるように思われます。暑さ寒さも彼岸まで。真夏の暑さにうだっていた身に九月にもなると涼風を与えてくれるし、酷寒に凍てついていた心に三月の太陽はぬくみを注いでくれます。この春秋二季の好季節に行われる七日間の仏教行事は日本固有のものであり、他国に

はありません。その起源は聖徳太子が崇徳天皇の菩提のために諸国の国分寺の僧に命じて金剛般若経を読誦させたことに始まると云われて居ります。仏教では中道を説きます。右に寄ることもなく、左に偏することもなく、いづれにもかたよらぬ中正の道、それが仏教であります。お彼岸の中日は昼夜の時間が同じであり、暑からず寒からず、太陽が真東から登り真西に没するその適正な日をもって、仏道修行の時季と定められたことに意義深きものを感じます。私は明治四十一年神奈川県内の純農村の小寺に生を受け仏飯を頂いて成育したものでありますが、彼岸の中日になりますと母に連れられて裏山の小高い丘に連れられて行きました。そして西の方、大山、丹沢連峯の山波に沈み行く夕日に向って合掌し「あのお日様の沈む処に阿弥陀様のお浄土があるのだよ。お手々合せて拝みなさい」と云われ邪気のなかった幼子は南無なむしたことを今でも記憶して居ります。このことはいわゆる釈尊が韋提希夫人のために説かれた観無量寿経の中の日想観であります。又阿弥陀経の中の「是より西方十万億の仏土を過ぎて世界あり、名づけて極楽と云う。その土に仏まします。阿弥陀と名づけ奉る」の経文の一節を母は知って居たかどうか知りません。ただ母は信仰心の厚い人で常に手から珠数を離さず、台所仕事や針仕事の折もいつも小声でお念仏を唱えて居りました。今から考えますと幼い私に宗教教育と云わぬまでも、よき浄土信仰の種を蒔いてくれたと感謝して居ります。

浄土宗に於ては指方立相と申して、阿弥陀経の説くように西方に理想世界即ち浄土があり、そこに阿弥陀仏が在すとの信仰に立って居ります。すなわちその浄土が彼岸でありま

す。この理想世界の彼岸に対しこの岸（此岸）が、現在私達が住んで居る娑婆世界であります。浄土に対して穢土であります。徳川家康が桶狭間の戦に破れ松平家の墓前において自決しようとした時、大樹寺住職に諭され、戦国の乱世を平和な国土になす決意の下「厭離穢土欣求浄土」の旗印を立てて幾多忍苦の末三百年に至る太平の世の基礎を築いたことはご存知のことと存じます。この八字の示すことこそ此岸より彼岸への念願を意味するものであります。戦国の世は真に乱世で親子兄弟共に骨肉相食む修羅道で一般民衆は朝夕心の安まることなく、塗炭の苦みの明暮あけくれでした。このような穢土から平和な彼岸を欣求した家康の心は当然のことと思います。さてひるがえって現代の世相は如何でありましょうか？確かに経済は成長し、物は豊かに街頭に、家庭に満ち溢れすべて電化されて何一つ不自由なものはありませんが、一面教育の場に於て、家庭内に於て、一般社会に於て暴力、殺人、汚職等日々テレビに新聞に報ぜられる事象を思う時「物に榮えて心に亡びるのが末世である」と示された釈尊のお言葉そのもので真に心痛むこの頃であります。然し漸くこのことに對し反省の色が見えて来たように思われます。正月の朝日新聞紙上に現代人の意識調査の結果が出て居りましたが、八十%以上の人が物、金よりも心が大切であると報ぜられたことであります。然し全体から見ると色にたとえれば灰色であると述べて居ります。

さてこの此岸から彼岸に到るための道について昔から各宗の祖師方によりそれぞれ貴重な教えが説かれて参りましたが、通仏教的な立場から見てこれに六つの道があると云われて居ります。即ちこの苦海を超えて彼岸に到達するための渡し舟で六度、専門的には六波

羅蜜と申します。波羅蜜とは梵語のバラミッタと云う語であり、これを到彼岸と訳して居ります。多くの人々が唱える心経は正しくは摩訶般若波羅蜜多心経であり、大なる（摩訶）智慧（般若）を極めることによって彼岸に到達する（波羅蜜多）ことを説く心経と云う意であります。この六度を列記しますと布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六つであります。紙数の関係でこれを詳細に説明することは許されませんが、簡単に申しますと布施は単に金や物によって人に施すだけでなく無財の六施と云って深い慈悲心により体全身によって人のために施しをすること。持戒とは釈尊が示された仏道修行の戒は百戒、二百五十戒等極めて多くありますが、一般人として守る戒は不殺生戒（殺すことなかれ）不偷盜戒（盗むことなかれ）不邪淫戒（生活上に於て乱れることなかれ）不妄語戒（真実の言葉をもって語れ）不飲酒戒（酔いしれることなく覚めた行をなせ）の五戒であります。忍辱とはこの世は娑婆（印度の言葉で忍土と訳しています）である以上、物心共にすべての苦に耐えて強く生きて行くこと。禪定とは心を一処に住して散乱せず精神の静寂を保つこと。精進とはその言葉の示す如く生活の上に於て怠ることなく絶えず励み進み行くこと。智慧は頭につめ込む知識でなく体を通して真実のものに目覚めること。以上の六度を行ずることによって彼岸に到達することを教えて居ります。

然し私達は、この六度の中の一つさえ果して真実に行ずることが出来るでありませんか？ 布施行にしても自分の身を、又家庭を犠牲にしてまでも人のために施すことが出来ましようか？ 五戒の中の殺生戒にしても私達は他の生物の生命の犠牲によって生かされ

て居り、妄語戒にしても、私達は日常飾ることなく真実の言葉で他に接して居るでしょうか？ 忍ぶことに於ても、精進の上に於ても、一生を通じて何一つこれを完全に行ずることとは困難なことであります。これらを完遂することのみが彼岸に到達する道であるとするならば、為し得るものは果して何人ありましようか？ 大方の人間はこれらの行によつては到底彼岸に到達することは不可能であります。

この点に目を注がれたのが法然上人であります。父時国公の遺言を守り、十三歳にして比叡山に登り幾多忍苦の学問修行の結果智慧第一の法然房と称せられ、将来叡山の棟梁としての座を約束せられた上人が山を下られたのは何であつたでしょうか？ 有智無智男女の差別なく、日々三毒煩惱の鬼にせめられて居る一切衆生が彼岸に到達する道は何であるかを探求するためのものであつたのです。然し智慧第一と称せられた上人に於てさえ「わが身は戒行に於て一戒をも保たず、禪定において一つもこれを得ず」と深い自己反省の上に立つて当時の多くの智者、学者に救いの道を求められましたが、誰一人としてこれに答える者は居なかつたのであります。その結果再び比叡の山に登り黒谷の庵室報恩蔵に独り籠られて大藏經を読まれること五遍、その間のご苦労を法語の中に「なげきなげき経蔵に入り、悲しみかなしみ聖經にむかいて手づからひらき見しに云云」と述べられて居ります。このような忍苦精進の結果、四十三歳の一日遂に善導大師の觀經の疏の中の「一心に専ら弥陀の名号を念じ行住坐臥時節の久近を問はず念々に捨てざるをば正定の業と名づく。彼の仏の願に順ずるが故に」の一節に目をとどめられ、遂に弥陀本願の念仏による凡夫救済

のための彼岸への光明を見出されたのであります。ただちに難行道を捨て易行道としての浄土宗を開かれたのであります。ご法語の中にその間のご心境を「難行道はけはしき道をかち（徒歩）にて行くが如し。易行道は海路を舟に乗りて行くが如し。足なえ目しいたらん人はかかる道には向ふべからず。ただ舟に乗りてのみ向ひの岸に着くなり」と述べられ、称名念仏こそ浄土の彼岸に到る渡船であることを示されて居ります。

然し近代の科学万能の教育を受け、合理性に慣らされて居る現代人にとり、この教えを素直に受け入れることは容易ではありません。行に於ては易行でも、信に於ては難行であります。阿弥陀経の中にも「この難信の法を説く」と示されて居ります。然し私達は究極に於て、還愚の立場に立つてこの道によるしか救われる術はありません。歎異抄の中で親鸞上人は「念仏はまことに浄土にむまるるたねにてやはんべるらん。また地獄におつべき業にてやはんべるらん。総じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからずさふろう」と南都、北嶺の念仏に対する弾圧の風強き中であつて、この念仏の教えに對し絶対的に信を強めて居られます。私達は彼岸への道としては「知者のふるまいをせずして、只一向に念仏すべし」のご遺訓を信条として、日々称名念仏に励むより外の術はありません。

法然上人のお言葉を拝して

時とき 岡おか 秀しゅう 雄ゆう

(御所市生蓮寺住職)

「現世をすぐべきやうは、念仏の申されんかたによりてすぐべし。念仏のさわりになりぬべからん事をばいとい捨つべし。一所にて申されずば、修行して申すべし。修行して申されずば、一所に住して申すべし。ひじりて申されずば、在家になりて申すべし。在家にて申されずば、通世して申すべし。ひとりこもりいて申されずば、同行と共行して申すべし。共行して申されずば、一人こもりいて申すべし。衣食かなはずして申されずば、他人にたすけら

れて申すべし。他人のたすけにて申されずば、自力にて申すべし。妻子も従類も、自身たすけられて、念仏申さんためなり。念仏のさわりになるべくば、ゆめゆめもつべからず。総じてこれをいはば、自身安穩にして、念仏往生をとげんためには、なに事もみな念仏の助業なり。三途にかえるべきことをする身をだにもすてがたければ、かえりみはぐくむぞかし。まして往生すべき念仏申さん身をば、いかにもはぐくみもてなすべし。念仏の助業ならずして、今

生のために身を貪求するは、往生の助業となるなり」

右に掲げたのは、法然上人のお言葉の中でも、念仏の信者が実際の社会生活を、如何ように処して行くべきかを示されたものとして、有名なお言葉、所謂御法語である。法然上人の教えを信ずる者のたいていは知るところである。

法然上人の暖かく広やかな心の現れであり、念仏信者は物事に拘泥することなく、念仏の中に世を渡って行けば好いのだという位の意味に受けとられていることが多いように思われる。

果たしてそうだろうか、と私は時折に考えるのである。

このお言葉の聞き手は禅勝房である。禅勝房は始め天台の教えを学んだ。己の機根を省て、天台の修行では自分の得脱は不可能だと判断した。二十九歳の時に熊谷直実(蓮生)の紹介で法然上人の門に入った。時に上人は七十歳であった。禅勝房が、上人の座下にあったのは、上人流罪の事件の起るまでの、わずか四年位のものである。

う。上人に師事する期間は短かく、大して学問のある人ではなかったと思われるが、「上人給仕の御弟子の中に、信心堅固のはまれありき」と伝説は伝えている。

禅勝房という人は、熱心に法を聞き、筆まめに書き止めたのであろう。彼が上人より承ったと伝えられる上人のお言葉は割合に多く、読めば読むほど心に有りがたい感じが湧き起ってくるのである。これはまさしく、禅勝房が学者ではなく、信心堅固の人であったからだろうと思う。

さて「現世をすぐべきやうは……」の御法語は、伝記に依ると「後生をば弥陀の本願をたのみ申さば、往生うたがいなし、現世をば、いかがはからい候べき」との、禅勝房の問いに答えての法然上人のお言葉は「現世をすぐべきやうは……」とあった理である。生活の中で左右何れの方に決着すべきかと岐路に立った時には、念仏の申されんかた(方)、申しやすきかたに決着すべしとのお示しと解する。

「念仏のさわりになりぬべからん事をばいとい捨つべし」の一句があり、続いて「一所にて申されずば修行して申すべし。修行して申されずば、一所に住して申すべ

し……」と続くのである。そしてさらに御法語は、「妻子も從類も、自身助けられて、念仏申さんためなり。念仏のさわりになるべくば、ゆめゆめもつべからず」と説かれてゐる。

私自身に当て嵌めて考えてみるに、妻子も寺も檀家さんも、僧という身分も、念仏申さんがために、他のものを捨てて簡び取った道ではない。今更に捨てようにも捨てられず、他の道を選んで進むだけの勇氣も力も無いだけのことである。

このように考えてみると、「現世をすぐべきようは……」のお言葉は、私にとってはまことに厳しく重圧とさえ感じられてくる。禪勝房という道を求むる心の厚い、信心堅固な弟子（師の座下を辞して故郷へ旅立つ時にであったのだろうか）に与えられたお言葉は、私のような男には背負いきれぬ荷物のように感じられる。「念仏の助業ならずして、今生のために身を貪求するは三惡道の業となる」私が日々やっていることは、三惡道の業の範圍を出てないようである。

誰にも開かれた往生淨土の道を裏書きするお言葉のように受け止めて、人に話すひともあるが、私には單純に

受け取れないのである。聞き手は禪勝房なのである。私は彼のように信心堅固な有りがたい男ではないのだ。有りがたくない男には、もっと有りがたいお言葉が無くては困るのである。

何回か繰り返し読んだ『勅修御伝』の第三十四配所御下向の巻、その中の遊女発心の章である。

「室の泊とまどにつき給うに、小船一艘ちかづきたる。これ遊女がふねなりけり。遊女申さく『上人の御船のよしうけたまわりて推参し侍るなり。世をわたる道まぢまぢなり。いかなるつみありてか、かかる身となりて侍るらん。この罪業おもき身、いかにしてかのちの世にたすかり候べき』と申しければ、上人あわれみての給はく――げにもさように世をわたり給うらん罪障まことにかるからざれば、酬報またはかりがたし、もしかからずして、世をわたり給いぬべきはかりごとあらば、すみやかにそのわさをすてたまうべし。もし余のはかりごともなく、又身命をかえりみざるほどの道心いまだおこりたまはずば、たたそのまゝにて、もはら念仏すべし。弥陀如来は、さようなる罪人のためにこそ、弘誓をたてたまえる

ことにて侍れ、たたふかく本願をたのみて、あえて卑下することなかれ、本願を憑^{たも}みて念仏せば、往生うたがいあるまじき——」

私はこの法然上人が遊女へのお言葉を拝した時に、あこれこそ私へのお言葉であると心に浸み入る思いがしたのである。すなわち、「もし余のはかりごともなく、又身命をかえりみざる程の道心いまだおりたまはさば、ただそのままにてもはら念仏すべし、弥陀如来はさようなる罪人のためにこそ、弘誓をたてたまえることにて侍れ……」というありがたいお言葉である。

この遊女であつた婦人は後日黒髪を切り落したのである。私は坊さんということになつてはいるけれども、私はすでに七十歳である。閑通上人のお言葉に次のような一文がある。「余が齢すでに七十、立てば阿弥陀を忘れ、居ては阿弥陀を称えず、忙しければ尚阿弥陀を廃す。功德を積まず、善根を修せず、放逸懶惰無慚無愧、何を以てか後世を渡せん。唯頼みたてまつる南無阿弥陀仏」と。心から拝読させて頂き、老生を念仏生活の中に日々暮らしたい。

◇“浄土句集” 欄投稿要項

多くの方々のご投句をお待ちしております。お仲間の方々も広くお誘い合わせ、一句でも多く投句して下さい。大本山善導寺のご法主であられます田牛畝先生も大変にはりきつておられますので、ふるって作句して下さい。

一 ハガキ一葉に四、五句づつ、あるいは封書に何句でもお書き下さい。

一 投稿先——

〒839—11 久留米市善導寺町飯田550

大本山善導寺 一 田牛 畝 先生 宛

〒812 福岡市博多区中呉服町10—14

正定寺 一 田牛 畝 先生 宛

〒102 東京都千代田区飯田橋1—11—6

法然上人讃仰会

△世相評談▽

内の目、外の目

— 大きい家小さい家 —



丹羽演誠

(大分県佐賀関町正念寺住職)

社会福祉は常に障害者を対象とする立場と
社会一般の福祉向上を求める立場がありま
す。

現在衣食住の生活の向上は、考えるべき状

態です。食についていえば、外食は四割食べ
て残りは捨ててゐるそうです。

住について、考察して見ます。私の小さい
町ですが、いつの間にか立派な鉄筋コンクリ

1トの家や木造の家があちらこちらと出来て来ました。住んでいる人々が、落ちついた頃伺って見ると、立派なものです。家具も新しく用意されています。然し床間については、そこまで届いてない様子です。更に土地の狭い関係でゆとりのある場所は少ないのです。木材も立派です、あれは〇〇産です。

その時こんな話を思いました。有名な大工さんが、「木造の家を建てるなら1ト山買ってその木で家を建てなさい。ひづみが来ませんから。立派な木を集めて建物を造っても問題がありますよ」と申しました。

さて瓦も紋入りです。感心しながら見せて頂きました。

この家、「失礼ですが」「〇〇〇〇万」かかりましたか、「それは大変でしたね」

一体この家族年にどの程度の収入があるのでしょうか。聞いて見る。「会社の持家制度、住宅金融金庫と一部自己負担で出来上がっています」と。なるほど、住宅について

は、建てやすい状態です。

あとで考えて見ると、本は少しもなく、子供部屋に百科辞典があった程度。

ここまで見ると、その返済のために夫婦は共稼となって働いているのです。目的こそあれ、生涯を家を建てるために働いて来た様な、むなしさを感じました。

昭和三十八年十一月三日、西日本新聞の西日本文化賞を師匠が頂きましたので、同伴させて頂きました。その折、九州大学学長の菊池勇先生が次の言葉を申されました。

「私は一生涯借家住いです。友人が家を建てたらと申しますが、それだけの費用があれば一冊の本でも買って研究します。子供たちは、すきな処に住むでしょう。」

夫婦二人で、人生を味い、教養ゆたかな人生を送りたい」

と申されたのです。

昔と今と違ってはいますが、それはそれでよい、人間として、分に応じた、心豊かな建物

を築くことが大切と思いました。

× × ×

施設に來ている三十名の精薄者と、生活を共にしていますと、家庭の中の生活が現われて來るのです。

○女の場合この子のために兄は別居、父親は、○女を卑下して酒を飲み、母は性格はゆったりしすぎているために、○女は幼い折から放浪性があり、時折友人を誘って遊び廻り、自分の行動を認めてほしいために、事件を起すのです。以前、夜十一時頃、○女から電話で「酒に酔った父親が母をたたいてるので来て下さい」とのこと。早速行って事情を聞いて見ると○女のことからです。聞けば分かるが、心の底に○女に対する不信観がある様です。

それに比して、T君は、IQ一九で、ほとんど口もきけません、純心でみんなに愛さ

れています。然し、食物の限度に分りません。

半身不自由な母親と姉さんと三人暮し、兄は別居。姉さんがT君のため、結婚もせず看護婦の生活をして、T君の面倒を見ているのです。母親が信仰深いので、三人連で八十八ヶ所を廻る程です。明るい家庭です。

× × ×

この二人の例を見て、感じることは、子供に対する親の真剣な取り組みが大切であり、そこに自ら愛情の世界が湧いてくるのではないのでしょうか。親が真剣でないところは、子供のどこかに欠点があり、問題が生じます。

それは障害児学級と養護学校の親を比較する時、障害児学級の授業参加でもこの教室はすこし見学して、よく出来る子の普通学級の方へ参観するのです。すべてとは申しませんが、それに比して養護学校は、低度も低い関係かも知れませんが、親は熱心です。又先生

もその様に指導しているのでしょう。然も先生も熱心です。

K女は自閉症で家では話をするが、学校では、親しい二、三人と「小声」で語るのみです。たまたま実修を引受けましたところ、校長、教頭、担任と毎日、見学に来る、やがて、実修を終へて、学芸会の折、K子さんは、授産所でしたことを作文にして、発表すると云うので、担任の先生も、何とか、成功する様に毎夜電話をかけて、励ました、然し現実には出来ず、テープに取って発表したのです。

救われる者、救われない者、それは、それを取巻く、親、家庭、地域社会の協力と理解がないと出来ません。

その中、社会の壁は、厚いものです。毎年障害児学級に入級をするために二回のテストをして、親と先生が相談いたします。そして実状を説明して入級をすすめます。いつも、半分程度しか入級してくれません。特に老人

のいる家庭は、隣り近所を心配し、恥しいと申しています。本人の為にはならないのですが、最後に子供の状況を児童相談所に相談して、「検査して一年間の指導を教えて頂ければどうですか。その結果にいたしましょう」とやっとな得するのです。

療養手帖と云う、身体障害者手帖と同じものがあるのです。その手帖が出来た折、民生委員にお願いいたしました、ことわられました。

「私は智慧おくれの子供です」と云う証しを探して渡すことは困ると云うのです。

考えて見ると現実を見、考えることが第一です。大体、この療養手帖は二年に一度検査があるのです。従って、そのことを相手に相談すれば無理のないことですが、民生委員でこれですから、ましてそれ以外の方での理解は、まことに遅いです。

然し国際障害者年以來、大きく変わって来ました。ふれあい広場とか、福祉の船、一般社

会との交流が出来たことはたいへんうれしいことです。障害者は純粹です。そして立派なものをもっています。すべての人を信じています。

然しここに問題があります、一体この者は、どの程度のびるのであるかと思う時、泥に足を踏入れたのと同じ、底知れぬものがあるのです。

或日M女を訪ねて、授産所に参加する様、すすめました。すると実兄が「M女が一人前の仕事が出来る様になりますか」と云います。

この言葉に「普通人の一人前は出来ませんが、M女の出来るものは何かあると思います」と答えましたが、コレも、いわば人生の一コマです。

× × ×

ケースワーカーとN君と三人で中食を取り、N君を授産所に入所する相談をしています。

した。私はN君に「君は長男だなあ」と云った時、突然N君が立って、顔色が青くなつたのです、日頃どうしているかと聞くと、「ねてる」と云うので、すぐ「ねかせ」ました。テンカンの発作です。早速姉に連絡してもとに帰りました。現実には働きたい意志があつてもこの様なことが突然起るのです。

非行少年は発心すればよくなり、身体障害者は頭脳明哲です。然し精薄者は自己の主張は出来ません。その標準は定めにくいのです。

従つて視察と同時にそのものに当たる以外に方法はありません。福祉の谷間と云われるのは当然です。

しいのみ学園を訪問した時、園長先生も三歳の子供も一緒に雑巾がけをしていました。不自由な身体でローカを拭く……これ程揺さぶらないと芽が出ないことを知ったのです。

障害者は釈尊の再来です、と誰かが云った。礼拝の生活が救済への一歩であるのです。

…「布哇通信」より…

ハワイ開教史話



鷺見定信
わしみじょうしん

(大正大学講師)

ハワイに浄土宗の教えが伝えられて九十年をこえた。

昨年十月にはホノルルの浄土宗別院を中心にして盛大な記念式典が行われた。

九十年にわたるハワイでの布教活動は平坦なものではなかったことは、本誌に連載された前ハワイ開教総監の新保義道師の「浄土宗のハワイ開教」(『浄土』五十卷九月号、十月号、十一月号、『浄土』五十一卷二月号)に明らかである。

信者は日本から移民としてハワイに渡った人々である。

当初はハワイで働いて貯蓄し、日本に帰ろうと考えていた人々でもある。しかし氣候、風土や生活、慣習もちがう異国である。当初の予想とはずれ、過酷な労働におわれる日々は人々の心は荒らすばかりであった。ハワイ宣教はまず道徳的退廃をただし、宗教的安心をあたえることにあったとみてよいであろう。ハワイに宣教を企画して組織されたのが、「布哇宣教会」である。その趣旨には「……彼等の最も依る可く最も恃む可き安心立命の消息は、己に絶え之を聞くことが得ざるなり 故に彼等或は先亡の年忌に逢ふも、追福の法要を修する道もなく……彼等は宗教上浮浪の民たらんとす……況んや、彼等の周囲を視よ、酒食と云ひ、賭博と云ひ、種々の誘惑物のあるあり 動もすれば、彼等の心を奪ひ去て、放蕩無頼の風に移さんとする恐あるとは……」と記している。こうした人々に宗教的救済の手をさしのべたのが宣教使（後の開教使）であった。

ハワイの浄土宗宣教は二人の人物によつてはじめられた。松尾諦定と岡部学応であった。両師のあとをたどることによつて多少とも当時の様子がうかがえるであろう。幸いにして両師は布教の実情を『浄土教報』誌上に「布哇通信」として報告してきているので、以下適宜に引用していきたい。松尾諦定は明治二十七年三月十六日に横浜を出帆し、同月二十五日にホノルル港に到着した。しかし、すぐさまの上陸は許されなかった。

「……横浜出帆より実に十有一日目にして安着せり 人々何れも上陸を急ぐと雖も折悪しく日曜日なりしを以つて上陸を許さず ○廿六日晴 十二時頃漸く上陸して直に Quarantine に入る コーランティンとは検疫所の義にして東洋亜細亜の各国より来る船客は一旦此処に入れ定期の消毒を行ひたる後府内に入るを免すという……」

結局松尾は検疫所に一週間とどめられ、四月二日にホノルルの日本人旅館へ投宿することができた。

岡部を待つ間に家屋を借り、布教の準備をととのえたが、「寧ろ目下の景況は某宗僧侶の所業宜しからざるため一般僧侶に対する信用は地に委し居るを以て之を挽回せざる可からざる場合に付き困難の時期にあり」と伝え、「僧侶に対する疑惑を去り人民をして信頼の念を起さしむるにあり……」と決意している。

松尾の派遣は公的な僧侶の渡布という点では日本の仏教各宗では最初のものであった。しかし私的には幾人かの僧侶がいたことも事実である。すでに真宗では曜日蒼竜が単身で短いながら布教を行って内外ともに評価をうけていた。だが曜日が帰朝したあとにも幾人かの僧侶があつて寺院建築の名のもとに寄附をつのり持ちにげしことがあつた。こうした事件のあとにハワイに上陸しただけに、松尾、岡部も苦勞が倍加したのである。

五月四日、横浜港を出発した岡部学庵は同月十四日にホノルルに着き、二十一日に上陸を許され松尾と合流した。岡部は阿弥陀像を背負つて上陸した。

「供奉の尊像は一旦税関に入れ、夫より馬車にて宿所に供奉し乍庵未打敷を買入れ 仮に安置し読経開眼致し候間もなく一名の日本婦人来り 拙僧に向ひ仏像を指し日本の仏様でなきかと尋ねしかは今回布教の爲め供奉の次第を述へしに 彼の婦人は……今より五六年前夫婦同伴渡航せしに不幸にも夫に死別し 愛子を喪ひ自身も亦病魔に障へられ不仕合を重ねしを述へ 本日斗らず尊像を礼拝し且つ拙僧同郡の者たるを聞き坐了に感涙を催ふせり 直に口を嗽き身を浄め 仏前に焼香礼拝の上称名念仏し ポケットより廿五銭の銀貨を出し先亡追福を営み……是を本尊阿弥陀仏の利益衆生の初因縁にて感喜に堪へす 爾来拙僧の渡来を伝聞し西蓮寺教会衆の者は追々参拝し……」

信者は集まつたものの、「何分現今するボルキー長屋は倭屋にして凡聖同居に勿体なく、新たに家屋をもとめているが、物価が高くて想うような所に移れないことを嘆いている。

しかし七月には岡部はマウイ島、ハワイ島を巡回布教をし、滞在地在ハワイ島にもとめて定期布教をすすめ、松尾はオアフ島に布教をすすめ、十一月にはカワイ島に五十四日間にわたる巡回布教を試みている。

松尾のカワイ島巡回布教は「……耕地殆んど九ヶ所其出稼人員大凡一千六百人而して説教開筵十五回 此参聴三百四十四人……」と報告している。また各耕地の墓地の様子についても言及している。

「実に言ふに忍びざる程の有様なり 唯ホノルルなるマキキイのみ幾分カ墓地らしき地所あり 然れども諸耕地に至ては唯名のみにして其実は野原と異なるなし 草茫々として腰より高く そを押分け踏み分け到り見るに雨に曝された木の墓標 それも文字磨滅して此処彼処に倒れ 土饅頭の形は頗れて何れが墓なるや知りかたし 偶々垣結び廻したるものあれとも参詣者もなく香花の供養更らになし 實は荒涼凄愴と云ふより外なし……」

翌年、ハマクア仏教会堂とともに日本人墓地が設けられるのもこうした経験によるものである。松尾はオアフ島にもどつて布教をするが明治二十年四月には再びカワイ島に向つてゐる。

他方岡部は明治二十七年七月十一日にホノルルを発し、マウイ島に、八月五日にはハワイ島に渡つて日本人キャンプに布教を行った。主としてハマクアを拠点とした。

「ハマクア カラッパアに滞在し 毎月出張説教の日を定め一日四日迄はホノカア 六日～八日クカイアウ 九日～十一日パウイロ 十二日～十六日パウハウと為し 其説教所をも一定し 十八日～月末までは東オカク四ヶ所 ババルア三ヶ所 西クタイハイレ五ヶ所と為し」と成果を報告している。こうした努力が実つて「墓地宅地牧場等を購入する計画を為し 仏像安置の爲め道場を建立」する計画がたてられたのである。

明治二十八年九月五日の『浄土教報』誌上には「布哇宣教の好消息」として建立計画が載せられて

いる。同時に勸募文も転載された。それには「今回有志諸兄と相謀り浜桑郡中央パウハウ パウイロの中間に於て清浄の地を相し 尊像安置の堂宇即ち教会場を造営し 併せて共有墓地を設立し 永く仏種を当国に植え同胞先亡者の霊を地下に慰し且つ本国父兄親戚をして聊其の堵に安せしめんとす 希くは同感の諸氏浄財を義捐し 以って此の企画を完成せしめられんことを謹て乞ふ」と訴えている。このよびかけに応じて日本では「布哇宣教義捐金臨時募集」が樹下隆信他五名の発起人で行われ、総額四百十六円をあつめた。また日本領事館も三百ドルを下賜した。信者からも三千円近くをあつめることができた。

こうしてハワイではじめての仏教寺院がたてられたのである。「会堂は間口四間奥行六間 位置はハマクア郡の中央パウハウ耕地に存し……境内の東北に三反の共同墓地ありて会堂に付属せり……」と概況を語っている。

工事は明治二十九年九月二十五日にとりかかり、十一月二十六日には入仏式が行われたのである。これがハマクア仏教会堂である。

明治三十年の冬には岡部は帰国し、松尾は風土病に犯され帰国を余儀なくされた。両師のハワイでの軌跡は必ずしも明らかではない。ハワイに仏教が伝えられ、その表象である寺院がたてられたのは両師の努力が第一の要件であることは事実である。両師は浄土宗をハワイに伝えた、というだけだった。

その後のハワイにおける浄土宗や日本仏教各宗派は単なる宗教的奉仕をこえて日本からの移民の人びとの精神的支柱となり、日本人同志のつながりを強める役割をも果たしたのである。寺院は日本社会を統合する象徴であった。こうした基盤を作ったのも、両師の方針にあった。

（読）（者）（の）（べ）（い）（じ）

私自身のこと（続）

— 仏教的生き方を求めて —

みどうこうち
御堂河内 四市 しいち

昭和五十九年三月一日発行の『浄土』第五
十卷三月号の三十五ページ上段七行目に記載

の通り、私は昭和九年春関大法科卒。朝日新
聞大阪本社に入り、福井支局を振り出しに各
地に転勤した。二十年四月徳島支局長から福
井新聞社へ出向、七月十九日夜の福井空襲に
あい、八月十五日終戦、十一月十三日開拓者
として高女四年と二年の娘二人を中退させて
現住所に入植、今日に至っている。現在は、
私には妻との間に子供九人、孫十九人あり、

妹娘は大妻女子短大卒。現在大野市内で小学
校の先生を勤めている。

姉妹二人を中退させて入植する時、五年間
に三反歩開墾が条件であった。二十年の入植
者は、東京、名古屋、大阪、神戸その他各地
の戦災者で、二十一年の入植者は、外地から
の引揚者が中心で、条件は前年の入植者と同
じく五年間に三反歩開墾する条件であった。

私の姉妹は、妻と共に二十三年末までに三
反歩開墾してくれた。姉妹は、最初の約束通

り開墾したが、学制改革により、高女も中学も農学校も高校一本になっていて、社会情勢の変化により、私達入植者は五反歩、六反歩開墾することになっていたので、娘二人に対しその事情を話して、引き続き開墾するよう話すと、姉妹は怒って「親は嘘をツクのか」と喰ってかかった。私達夫婦は答弁に困り、「わかった、親が子供に嘘をツイてはいかん、お前らの言う事を聞こう」と言った所、姉妹はアルバイトしつつ福井ドレスメーカー女学院に行くと言ってその手続きをした。妹娘は高校へ行きたい、と言ったが、私に経済的余裕がない、と言うと「アルバイト」で進学するという。私は「男のアルバイトは聞いたが、女の高校アルバイトを聞いた事がない」と言う、妹は「それでは親子の縁を切ってもアルバイトをする」と言う。私は「親子の縁は切れぬ」と言う、妹は「それでは犬や猫の様に縄で括って柱に縛り付けるか」と言うので、私は「人間はそれは出来ぬ」と言う、

娘は「そんなら、夜の間に抜けて行く」と言う。そんな事になっては大変だ、と言う訳で無尽会社で五万円借金して大妻女子大短大部へ授業料として二万五千円払い込み、下宿料として残りを持たせて東京へ行かせた。妻は四―七月までの一学期間東京へ行かせたら、「とても女の子のアルバイトは出来ぬ、言うってホウホウの態で帰って来るに違いありません」と言ったが、下宿屋から一カ月経たぬ内に「友人と一緒に下宿する、と言って家を出ました」とハガキが来たきり、本人からは何も言わず、妻は心配して私に「警察へ捜査願を出して下さい」と言ったが、私はそんな事は出来ぬと断わった。妻は泣きながら「でも嫁入り前の娘の行方がわからんではありませんか」と私をせめたが、私は「盆暮れ新聞のネタになる」と言って妻の要求をしりぞけた。

盆暮新聞というのは、夏の中元広告を出す盆新聞と、暮新聞とは、年賀広告を出す新聞

の事。これを、盆暮新聞と我々日刊紙記者は称していたのである。

ところが、その妹が年末にヒョッコリ帰宅したのである。妻は大いに喜び「もう行かんだろう」というと、妹娘は「あと一年で大妻短大を卒業するから行く」という。そこで私は「あと一年どうするのだ」と聞くと、娘は「花王石鹼で一年間アルバイトする約束をして帰った来た」というから、私は「今まで何をしていたか」と叱ると、「後楽園の競輪場で切符売りをしたり、自民党本部婦人部でアルバイトをしたが、自民党本部婦人部のオバさんらは程度悪いよ」と言っていた。そこで私は「厄介になっていて何を言うか」と叱りつけたが、娘は「あのオバさんらは程度が悪い悪い」と言い続けていた。

娘は間もなく上京して、大妻短大を卒業して帰って来て、当時の大野郡西谷村中島の中学校の先生に就職した所、私と同じ福井新聞社に勤める男から「嫁に出さぬか」と言わ

れ、私が「相手はどこ誰か」と聞くと、彼は「私の親類で、居村―上庄村―の郵便局長M氏の息子だ」との事に、帰宅して妻にこの事を話すと、妻は翌日上庄村へ行き、M家のことを調べたところ、M家は同地方では立派な家柄という事がわかったのである。妻は「あれなら嫁に行かせてもよろしい」というので、近くの知り合いの家で見合いをしてM家へ嫁に出すことにして、結婚式を挙行したのである。

そのうちに娘は上庄中学の先生に転じ、生まれた子供（女児）も母と同じ学校へ通学することになり、母子が同じ学校では都合が良くない、というので、私の娘は大野市内の有終中学に転動した。その後、有終中は近くの小山中と合併、開成中学と改名した。そして、開成中学の先生から大野市有終南小学校に転動。同校が同市内南方春日町に新たに移転したので、現在は同小学校に勤務している。ともかく、みんな元気な顔張っているのである。

◇◇竹中信常博士頌寿記念論文集◇◇

宗教文化の諸相

〔編集・発行〕 竹中信常博士頌寿記念論文集刊行会

〔体裁〕 B5判変型一四〇〇頁 定価三五〇〇円

○すいせんのことば

浄土門主・知恩院門跡 藤井 応

〔宗教人必読の書〕——竹中博士の頌寿と大正大学ご退任を記念して刊行された『宗教文化の諸相』を拝見させて頂きますと、今日の学界を代表される内外の学者が寄稿され、しかも内容は多岐にわたる専門分野がカバーされています。博士の人となり、学問の広さを如実に示しているといってもよいでしょう。今日、仏教界をとりまく現状はきびしいものがあります。幅広い知識と絶えざる研鑽が宗門人に要請されています。本書はまさに時機を得た恰好の書といつてよいでしょう。広く江湖に推せんしたいと思います。

●発行●

〒170 東京都豊島区西巣鴨三丁目二〇番一号

大正大学宗教学研究室内

竹中信常博士頌寿記念論文集刊行会

電話〇三(九一八)七三二一番

●申込方法●

書店に御申込の場合は定価三五、〇〇〇円。

△発売元 山喜房仏書林▽

インド古典文学の香り

クリシュナの物語 (一)



小山 典 勇

(大正大学講師)

王は言う。

あなたによって日種・月種のくわしい家系が語られ、また両家系に属する諸王の最もすばらしい行状が語られた。

次に敬虔なヤドゥ族として(最高神)、ヴィシュヌの一部分によって、ここに化現したあなたの方(クリシュナ)の武勇を我々に話したま

え。

ヤドゥの家系に化現して、最高神・創造主・至福尊が行ったそれらをくわしく我々に話したまえ。

欲望を離れた人によって歌われ・輪廻の業・耳と心に楽しい・最も有名な方の功德を唱えることに、家畜を殺す者を除いて、一体だ

れが無関心であらうか。

私の祖父は、あの方を筏として海を子牛の歩みのように渡った。戦争で神々を征服するビーシュマなどの戦士という怪魚ミテインギラによってさえも、越えがたいカウラヴ軍という海を。

私の身体は——クル・バーンダヴァの両家の子孫であるが——ドローニーの子アシェヴァアッターマンの武器ブラフマーストラによって焼かれた。しかし私の母が依り所とした輪をもつかの方は、母の胎内に入り守った。すべての生類の内面的資質と外面的な立場に従い、創造主・時という姿で死と不死とを分け、また（ヴィシュヌ神の）幻力によって人間の姿をとるあの方の勇敢な行為を話したまえ。

ローヒニーの息子ラーマは（母の胎内から）引き出されて、デーヴァキの胎内に結合されたとあなたは話した。別の身体もないのになぜか。またどうして至福者クリシュナは、

父の家から牧草地へ行ったのか。そしてサートヴァタの主は親族と共にどこに住んだのか。

クリシュナは牧草地に住み、何をしたか。また都マトウラーで母の兄カンサを不正に倒したのか。

人間の身体をよそおって何年間ヴリシュニ族と共にヤドゥ族の町に住んだのか。あの勇者には何人妻がいたのか。

そしてさらに他のこと、クリシュナの行状のすべてを、聖者よ、淨信のために話したまえ。水を飲むことをやめた私を、かわきがたとえ耐えがたくても苦しめることはない。なぜならあなたの蓮華のような口から流れ出るあの方、クリシュナの物語りという甘露を飲んでゐるから。

スータは話をつづけて言う。

ブリグの息子よ。このように善人の質問を聞き、至福尊を信奉する人々の中の長・幸運なヴァイヤサの息子は、バリークシト王に敬

礼し、(世界の終末期)カリ期の塵を滅するクリシュナの伝記を話し始めた。

シュカは言う。

あなたの思慮は正しく定まった。あなたの喜びはクリシュナの物語に生じ不動である。クリシュナの物語に関する質問は、話し手・たずねる人・聞き手の三種の人を清める。足すすぎの水が(足を清める)ように。

さて、大地は百千の傲慢な王・うそつきのダイトヤの軍隊という多大な重荷に圧迫されて、梵天に助けを求めた。

(大地は)牛となって顔に涙をため、苦しみ、悲しく泣きながら梵天の前に坐って自分の不運を話した。

梵天はそれを聞くと、その時神々また彼女(牛・大地)とシヴァ神をとまって乳海の岸辺へ行った。

そこへ行くと世界の守護者・神々の中の神・ヴィシュヌ神をブルシャスークタ讃歌によって精神集中して坐った。

瞑想中に虚空に生じた言葉を聞いて梵天は神々に言った。

神々よ。最高神の話を聞きたまえ。そしてそのようにすみやかに実行したまえ。

大地の苦しみは最高神によってすでにつきとめられている。今やあなた方は一部分によってヤドゥ族に生まれたまえ。支配者の中の王が自分の時という力で大地の重荷を滅し地上を歩むまでに。

まもなくヴァスデーヴァの家に最勝の至福尊が生まれるであらう。天女たちもまた彼の好意のために(地上に)生まれたまえ。

千の顔をもつ・至福尊ヴァスデーヴァの一部分であるアナントは、クリシュナに好意をつくしたいとして、すでに生まれている。世界を混乱させるヴィシュヌ神の幻力も、王に指示され(地上での)任務のために一部分によって生まれるであらう。

シュカは言う。

生類の主の主・支配者(梵天)はこのように

神々の集団に命令して、大地を言葉でなくさめてから最勝の自分の住所へ帰った。

昔ヤドウ族の王シューラセーナは都マトウラーに住み、マトウラーとシューラセーナ両国を享受していた。

それ以来マトウラーはすべてのヤドウ諸王の首都であった。そこに至福者クリシュナが常に住んでいた。

さてある時、ここでシューラの息子ヴァスデーヴァは結婚し、新婦デーヴァキと一緒に（国へ帰る）旅のため車に乗った。

ウグラセーナの息子カンサは妹を親切にもてなしたいとして、金色の百台の車に囲まれ（中央の車の）馬のたづなをとった。

金の花飾りをつけに象四百頭と家具、馬一万五千頭、馬車千八百台と。

娘を愛するデーヴァカ王は、美しい娘の中のよく飾った二百人の娘を、わが娘に与えた。ほら貝・楽器・太鼓・大太鼓を合奏させた。ちょうど新郎新婦の行進が発する時、

幸運のために。

道すがら姿の見えない声がつづなをもつかんサに呼びかけて言った。愚か者よ。お前が運んでいる妹の第八番目の子はお前を殺すであらう。

このように言われて、邪悪な・悪漢・ボージャ族の塵である彼は妹を殺そうとして、剣をとり、髪をつかんだ。

嫌われる行為をおこなう・残酷な・恥を知らない彼をなだめながら、福々しいヴァスデーヴァは言った。

ヴァスデーヴァは言う。

勇者によつてたたえられる美德があり、ボージャ族の名を生むあなたが、どうして結婚の祭日に妹であるこの女を殺そうとするのですか。

勇者よ。生類の死は身体と共におこります。生命がある者にはただ今であれ、あるいは百年の後にであれ、必ず死は定まっています。身体が死に至った時、靈魂が業にしが

うのです。靈魂は（新しい）別の身体を得て（古い）前の身体をすてるのです。

たとえば人（の歩み）はまず片足でふみ出し、片足でささえ立ち（次々に）進んでいくように、またたとえはいも虫（が葉から葉へ移る）のように、靈魂も業の道を進んでいくのです。欲求によって心をうばわれた人は、このような身体であるのに、夢の中で（真実不変のものがあると思うようにこの身体を永遠である）見ます。そして見たたり聞いたりすることによって獲得したものを意（こころ）で思っているが、しかし（夢の中で得たものは目がさめれば）何であつても忘れてしまうようなものです。たとえば月光は水のはいった容器の中では、風の震動によつて（ゆれ動くように）見えます。そのようにこの靈魂は、自分の幻力によつて作られた性質属性の中で、執着心のいうままであり、惑わされている。

したがって自分の幸福を願う人々はだれであつても他の人の傷害を行うべきではない。

害する人には（更に）別の恐れがある。

この娘はあなたの妹です。哀れな人形のようです。弱いものにやさしいあなたはこの美しい娘を殺してはいけません。

シユカは言う。

このようにいろいろなための言葉で止められても、人殺しをしようとする恐ろしい心は思いとどまらなかった。

ヴァスデーヴァは彼のがんこなことを知つてそしてしばらく考えた。彼を思いとどまらせるためにひとまず同意した。

知者によつて知性と道理がある限り、死神は追いはらわれる。もし死神が思いとどまらないなら、靈魂には罪はない。

死神に息子たちをさし出すことにして、この哀れな娘を自由にしよう。もし私の息子が生れたならば、あるいはこの死神（のようなカンス）が死なないでいたならば（その時はそうしよう）。

あるいはこの反対のことはないであらう。

運命の神の道ははかりがたい。近くにある（死神）は近づいては去り、去っては近づく。思いとどまっても（死神は）再び現われるだろう。

たとえば火がたき木との分離と結分とで見られるように、人間の身体との結合と分離の原因は判然と認めがたいが、運命以外に原因はない。

ヴァスデーヴァはこのように自分で観察できる限り考えて、邪悪な彼をていちような敬意をはじめとして尊敬した。

清らかな蓮のような顔をした彼は心から悲しみ、恥しらずで残酷な彼に、ほほえんで言った。

ヴァスデーヴァは言った。

（つづく）

|| 好評 ||

竹中信常著

『仏教への問いかけ』

B 6判函入 二七五頁

定価 三五〇〇円（十二五〇円）

〔普及版〕 B 6判 一二三五頁

定価 二八〇〇円（十二五〇円）

○仏教の生活信仰を、宗教学の学問的蓄積とその真摯な実践体験を通して、改めて問いかけ、語りかけようとする――

△発売△

山喜房仏書林

〒113 東京都文京区本郷五―二八―四

振替 東京〇―一九〇〇

浄土句集

一田牛畝選

老なれど春着楽しき薄化粧
東京 真野よし子

評 春着を纏えば年のこは忘れて、心もはしゃぎ若返りたくなって、つい薄化粧もしたくなるらしい。

熊本 原田 妻人
牛の歩の急かずあせらず鋤始め

熊本 山崎 石庭
冬安居皆お揃ひの墨衣

熊本 石原 杏子
一っせいに鶴の舞ひ立つ初日の出

評 牛は馬と違って急がずあせらず悠々と歩くのである。田を鋤いている牛が手に取るように静かな農村風景が描かれているようである。

評 大法要なれば、集まって来られた衆僧の相は、色衣七条と美しいが、冬安居は寒中で修行研修が目的であるから、黒衣の僧達の精勤振りが現われている。

福岡 原 敬二郎
朝時雨出勤の人の小走りに

東京 細田 初枝
故郷へ方言出でし初電話

東京 吉田ゆきゑ
写経せる母偲はるる冬座敷

大分 丹羽 離中
初孫と新嫁揃ひ寺の春

評 故里へ電話していると、相手の方言に思わずつられて、忘れていた方言が出てくるのである。正月ともなれば、料理のことや、酒のことや色々話の種があることならん。

評 福祉功勞に依り叙勲された念仏行者の母が、生前写経されていた冬座敷に坐れば、恋し懐しの心がひとしお湧き起って来られたのであろう。

福岡 上滝津弥音
水桶でこと足るカット木の葉髪

福岡 荒牧 還愚
恙なき身をよろこびて初誦経

新年会何時しか村の年長に
群馬 島津 か寿

薄月さす庭の初雪惜しみけり
福岡 安藤平次朗

週一度通る道なり槿紅葉
神奈川 鈴木美智子

あがいても過疎には勝てぬ冬の村
山梨 青山富貴江

学園に僧を招きて針供養
福岡 行正一如子

一遍の誕生されし寺の春
福岡 前田 秀峰

先住の植えし山茶花紅美し
三重 山田 歌甫

冬の海渡りて母の墓詣で
熊本 山崎 松子

米豊作松茸不作の年とかや
山形 松田 光馨

おだやかな日々幸あり冬ぬくし
東京 吉原登起子

小春日の球磨川下る水しぶき
山口 上野 明達

母ませば一と日を母と日向ぼこ
山形 松田 允子

柳女忌と心に秘めて年惜む
東京 田中 秀代

老妻の細りしうなじ毛糸編む
福岡 荒牧 亀齡

賽者ふえ木魚響ける十夜かな
福井 深井 鉅士

真向ひに富士を仰げる大旦
東京 栗原やえ子

唯信じ生くるを期して除夜の鐘
熊本 山崎遣迎子

野路はろか渡れる鳥を仰ぎけり
広島 宮本浅次郎

日向ぼこ白河夜舟猫抱いて
東京 末常てる子

雨戸繰る音の乾ける冬至かな
長野 友洲旋風子

看取女も抜けて詣でし十夜かな
静岡 魚尾 芳子

年酒客気楽よろこび迎えけり
東京 小笠原香祥

小春日の鐘鳴りやまず地藏堂
福岡 服部 光代

獄窓に母恋ふ死囚春の月
一田 牛畝

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』三月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、小林治郎先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の小林先生の版画絵のほか、大西耕三先生の雅趣に富んだ版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八八二二八七

立ち止まるな善導

<9>

寺内大吉

挿絵・松 濤 達 文

前章・絶唱の経典(九)

△前章・最終回▽

の

二十五

今夕、町かどで故郷バーミヤンの修行僧を
ひとり見かけた、と駱駝夫人は闇の中で告げ
た。

「深い紅色のお袈裟をまっていますましたも

と、王妃は、なぜそれが故郷の僧だと見分
けられたのか、という少年サビヤの問いに答
えた。

「紅かい袈裟だって」
そんな色彩の袈裟をかけた仏教僧がいるの
だらうか。



サビヤたちが教えられたインド伝承の袈裟は青黒く濁った壊色（えじき）であった。

「衣地は？」

「大麻を織った袷（あわせ）の重衣ですわ」

これも異質だ。伝承の衣地は波羅那（木綿）で統一されていた。九条に縫い合わせて一枚の布片とする。

「むかし商那尊者さまが范陽へおいでになったとき、このお袈裟をまもっていたと伝えられています。だから現在でも仏教僧たちは紅色の……」

と王妃は大麻袈裟の由来を語る。

商那尊者——舎那婆私とも訳字があてられる。インド仏教の第四祖と言われる。「阿育王経」によれば釈尊滅後、その法蔵は大迦葉、阿難、末田地、商那と継承され、商那の弟子優波笈多が阿育王を教化して、仏教をインドの国教にまで拡大させた。

商那はマガダ国、王舎城の商人だった。海産物を商って長者となった。しかし晩年は阿

難のもとで入信した。師の遺訓を守って商那尊者は異教徒マツラ族の地へはいりこんで、精力的に仏法を説いて歩く。

マツラ族が釈尊涅槃の地クシナーラーの沙羅双樹をふくむ地域の住民であることは言うまでもない。その異教徒ぶりを「阿育王経」は商那尊者に襲いかかる五百匹の竜群で象徴させる。さらに同じ経典は「袈裟のこども替え」についても一つのエピソードで語っている。

商那尊者が沙羅双樹林に近い大河のほとりへやってきたときだ。路傍に老いた修行者が病みおとろえて横たわっていた。

——わたしは今から涅槃に入るであろう。

老修行者は商那に声をかけた。

——そんな諦めを言うものではないません。

と商那は食物や薬を与えたが効顯はなかった。ふと眺めると、老修行者がまもっている袈裟がたいへん汚れている。せめてこれだ

けでも小ざっぱりしたものに、と商那は脱がせて河の水で洗った。青黒く「龜沢」していた袈裟が鮮かな色彩に變じた。

老修行者は悦んで、

——汝は大きな功德をした。まさに歡喜を生ずべし。

と商那をたたえて眼を閉じた。

「阿育王經」はこの逸話を辟支仏と商那尊者との前生物語としているが、明らかに釈尊涅槃時の追想であって、それも商那は不在、師の阿難が目撃した悲しい釈尊の姿に「装おい」をほどこそうとしたにちがいない。

釈尊はあの折、鍛冶工チュンダが献じたキノコ料理を食べ、そのあと激しい下痢に苦しんだ。血便までほどばしたという。当然、まどっていた聖者の袈裟は汚れ放題だったであろう。このまま、この姿で涅槃へ入るのであるか。阿難は胸も裂りさける思いだったはずだ。

しかし、異教徒マツラ族のまっただなかで

ある。袈裟一つ新調することは許されない。阿難は生涯、釈尊のこの残像に苦しめられたのではなからうか。弟子の商那に、くり返し語ったことが想像される。

商那尊者はマツラ族の教化を終えると、足跡をバーミヤンへ伸ばしている。袈裟の伝説は、いつか師資相承の「伝衣」に変形し、バーミヤンの仏教僧たちの間で重んぜられたようである。ただし大麻の重衣とか深い紅色が商那尊者の「伝衣」であつたかどうかは明らかでない。

「それで、その故郷から来たらしい修行僧に声をかけたのですか」

閨房での寝物語が続く。

「逃げたわ」

「なぜ？」

「妾の顔に見おぼえがあるかもしれない。追手が范陽からも来るではありませんか」

「でも故郷へ帰るために……」

「もう嫌です。いつまでも、この町で、サビ

ヤ、あなたと暮していたい」

王妃は汗ばんだ全身を密着させてくる。

「わたしたちは正しい仏の道を求めて、朱駒波城を逃げ出したのでしょ。危険をおかしで……いや、わたしたちを救出するために何人も命を落しています」

「こうして、こうやっていても正しい仏さまの道が歩けるのよ」

王妃は眸のなかに確信の光りを宿して言った。

「それはどういう意味ですか」

「妾たちの間で赤ちゃんが出来るの。その赤ちゃんはね、紅いお袈裟をつけて生まれてくるのよ。仏法を信じてさえいれば……そういう教えが范陽にはあるのよ」

玄奘三蔵も、「大唐西域記」のなかでこれに似た伝説を紹介している。パーミヤンに釈尊の涅槃臥像をおさめた伽藍があり、そこから東南へ二百余里、大雪山(ヒンドゥ・クシユ)をわたって、東して小さな川沢に至る。泉池

は鏡のごとく澄み、林樹はネギのように青い、とある。そこに仏齒や商那尊者遺品の鉢が蔵されているという。

——商那阿難の弟子なり。先身中に在って商那草の衣を安居を解く日に持ちて衆僧に施したるを以て、この福力を承けて五百身にわたって中陰・生陰にはつねにこの衣を服し、最後身を以て胎より衣とともに出でたり。かくて身すでに漸長すれば、衣もまた広くなり、阿難の度して出家するに及ぶなり。その衣は變じて法服となり、且足戒を受けるに及ぶや更に變じて九条の僧伽服となれり。

商那草は大麻の皮をむいて編んだ布である。それを九条に織った真紅の袈裟を商那尊者はいつも身にまといたいという。〃商那衣〃と呼ばれた。

このパーミヤンの安居で、商那尊者は修法を共にした衆僧たちにこの法衣を布施した。功德はあらわれて、修法者たちは死ぬときも

この法衣をまとい、再び生まれ替わったとき、赤児の小さな身体にちゃんと真紅の商那衣を巻きつけていたという伝説である。

「この町で平和に暮し、仏さまにお祈りをささげることさえ忘れなければ、きつと生まれてくる妾たちの赤ちゃんもそのお袈裟をまとっているんだわ」

駱駝夫人の腕は少年サビヤの頸に巻きつき、頬をこすりつけてきた。王妃の両眼からは涙があふれ出ている。その感触がサビヤの心を甘く濡らした。

「ああ……」

「約束をして。いつまでも、このままで、こうして」と

幻の仏都バーミヤンへの道は、いよいよ遠のいてしまうのである。

二十六

未だ夜は明けきっていなかった。

明けきるどころか、カシユガルの町を出たときは暁の光りが感じ取れたのに、この沙漠へ出たら闇が再び戻ってしまったようである。夜明けの告知で、月も星も消えた。ところが太陽は余りにも広大な沙漠の地平のために未ださし昇って来ない。時間と空間とがもつれ合った矛盾が創造した瞬時の闇であった。

少年サビヤは、ただ歩くだけだ。わずかな白い光りを泛べるアムダリヤ川の水面だけを頼りに歩くだけである。

駱駝はいない。この二本の足に頼らねばならない。バーミヤンまで、どれだけ歩いたらいいのだろう。

駱駝夫人もいない。彼女は未だ眠っているのか。目をさまし、愛人の失踪を知って気も狂わんばかりに駆けずりまわっているのかもしれない。

この王妃との愛情生活を切断してしまうのは、サビヤにとっても辛いことだ。しかし、

サビヤにはやっておかねばならない仕事があった。

駱駝夫人が足手まといだ、と言うのではなかった。この仕事を完成させるべく、生きる残り時間が少なすぎるように思われてならない。

その仕事とは……タバス尊者から付法された「無量寿経」をより具体的に、より理解し易くふくらませてゆくことだった。これが、やがて「観無量寿経」の原形となるのだが、いまアムダリア川添いの沙漠を歩く少年サビヤには、「観想」することで全篇を統一する構想はなお熟しきっていない。

闇の後方から足音が追ってきた。人間のそれではなかった。

たちまちサビヤのかたわらを駆け抜けてゆく。まさに駱駝だった。その背の上には人影がある。

サビヤはその人影を思わず大声で呼び止めていた。

「わたしを范陽まで連れていってくれ」

闇でもはっきりと見分けられる深紅色の袈裟をまとっているではないか。

「范陽へ何しにゆく？」

駱駝の手綱をしばらくながら修行僧はふりかえった。

「大仏を拝みたい」

「説一切有部の徒か」

「小乗の僧がこんな恰好をしているか」

ラフな綿服に袈裟を巻きつけただけの胸をそびやかした。相手は笑った。大乘教徒の親愛感が自然に湧いたのだろう。

「大仏を拝がんで、どうする」

修行僧は駱駝をおりた。手綱を引いて、サビヤと肩を並べて歩きながら訊いた。

「釈迦牟尼世尊が信じた仏だったかどうか、この目でたしかめたい」

「仏が頼った仏を探がそうと言うのか」

修行僧は深い頬髭でさえぎられてこそいたが、その底にある顔は意外に若かった。

「頼ったかどうか、それはわからない」

「世尊は何者も信じようとはなさらなかったのではないかな」

「そうだ。無相は相にあって、相を離れる。

無念とは、念にあって念ぜず。仏に相はなく、ゆえに、仏相が鮮明となる」

「うむ」

「仏に念ずる仏は存在しなかったであろう。

だからこそ仏が念じた仏は実在したのだ。たとえば貴僧が、まどっているその商那衣だ。

伝衣の袈裟であろうが」

「そうだ。范陽に大乘仏教の根をおろして下さった商那尊者が……」

「ちょっと待って。袈裟なぞを有難がるのが大乘仏教かな」

サビヤは微笑みながら鋭い一矢を放った。

「うむ……袈裟ではなかったな。この袈裟をかけて未開の范陽の地へ乗りこんで来られた商那尊者その人を、いや、その心意気を有難く思わねばならなかった」

修行僧も微笑んだ。

このあとサビヤは、商那衣伝説がそこから誕生したのである「大バリニッバーナ経」のあの場面を語ったみることにした。語ることで、自分の思念に明確な進路を発見したかった。

クシナーラーの沙羅双樹の手前で、釈尊は鍛冶工チュンダの献じたキノコ料理を食する。そのあと下痢や血便で苦しむ。ひどい渴きをおぼえた。従者の阿難に水を汲んで来いと命ずる。阿難は二度まで拒否する。眼前の川は、車の列が通過した直後なので、すっかり濁っている。あんな水を飲んだら、病いはさらに悪化するであろう。

だが、三度目に同じ命令を受け、阿難はやむなく川のほとりへおりていった。ところがさっきまで濁っていた水が綺麗に澄んでいたというのである。阿難がそれを汲んでさざげると、釈尊は満足して飲み干した。

「この場面における釈尊の姿は駄々っ児そのものと思えないか」

とサビヤは念を押した。

「たしかその二度の拒絶で阿難尊者は入滅後
みんなから非難を受けた」

「わたしには釈尊の方が悪いと思う」

「しかし、川の水は現に澄みきっていたのだ
ぞ」

「澄んだ、濁ったではない。またそんな奇瑞
は仏法の採らぬところであらう」

「うむ」

「下痢や血便がほとばしって、渴きを訴える
のは下品下生の人間のすることだ。そこを我
慢するのが、おのれの欲望よりも周囲で心配
している者たちのことを考えてやるのが聖者
の態度ではなからうか」

「では釈尊も下品下生の凡夫なのか」

「すくなくとも病んで、袈裟を汚されたあ
の場面に限っては、救いがたい凡夫だった」

「思いきったことを言う人だ、あなたは」

「商那尊者が三衣を洗った伝説もじつはその
ことを訴えたかったのではないだろうか。あ

の釈尊にして、なおかつ救いがたい凡夫にな
ってしまふことがある。だからわたしには
すべての人間を救う仏が必要だ。これが大乘
仏教だ」

「うむ……釈尊も人間であった、ということ
だ」

「人間としての側面をわたしどもに見せて下
さったからこそ、いっそう尊いのだ」

紅衣の修行僧は、このときサビヤへ注いで
いた視線を抜き取ると、頭上にひろがる青空
をふり仰いだ。

すでに暁闇はぬぐい去られ、いきなり白日
の世界が沙漠をおおうていたのである。これ
が沙漠の特異な気象だったかもしれない。

「わしはな、東女国へ出かけた。そこに八年
間も滞在し、今が帰り道なのだ」

再び歩きだしながら、修行僧はしみじみと
した口調になって言った。

「東女国……」

少年サビヤが初めて耳にする国名である。

「知らぬかな。大雪山中にある国だ。その國王はむかし、世々女王だったのでそう呼ばれてきたようだ」

「その東女国で何があったのか」

「東女国が、ではない。わしはそこを足場にして大雪山へ登った。山稜を歩きまわり、五年間も雪の頂きで暮したぞ。大雪山と言っても黄金の大雪山」

「黄金の大雪山——」

小アジアでは高い山はどれも大雪山と呼んでいる。ただそれに「黄金」を冠したとき、特定の高山となる。

インドのヒマラヤ山のことだ。天から吊りおろされたようなこの雪でおおわれた「棚」は容易に登頂できない。未踏の霊山だっただけに、この雪壁の下はすべて黄金であろう、と信じられてきたのである。

小年サビヤには無論未知の山であった。

「五年間もあんな山上で何をしていたのか。黄金でも採りにいったのか」

「滅相もない。そんな目的で命がけの登頂などするものか。それに黄金はひとかけらもなかった。あるのは雪ばかりだ」

「では何を……」

「天を見ていた」

「天を？」

「朝に晩に天を凝視していた」

「なぜ？」

「あの山頂が天に最も近いと思われたからだ」

言われてみればそのとおりだ。世界の屋根——そこから眺める天体こそ、最も実像に迫り得る観察だったかもしれない。現代の科学、広角の望遠鏡では把握し得ないものを、五年間も暮しとおしたのであれば、掴み取ったとも言えるであろう。

二十七

ヒマラヤの山上で五年間も暮したという紅

☆☆

光
明



衣の修行僧の見聞談は、沙漠を歩いてゆく少年サビヤを酔わせた。

いつであったか。大崖仏塔のマトナ阿闍梨はサビヤを山頂へ連れだして、目くらむ太陽を、その周辺にひろがる宇宙を語ってくれたことがある。だが今、ヒマラヤ山上で五年の春秋を、昼夜をすごしたという修行僧の実感をこめた言葉に比べたら、それは所詮「頭脳」がえがく世界にすぎなかった。

「神秘と驚きで目をみはらせるのが夜空だ」と修行僧は感動を再現してくれる。

現代で言うエベレストの山頂をきわめていたのかどうか、それはわからない。またそんな「征服」は修行僧には無縁な行爲と言うべきであらう。

地上八千メートルをこえる山上に立つて星空を眺め続ける。どの恒星もが生きているという。個々に生き、集団をなして生きる。彼らは結合と分裂をくり返しているかのようにあった。

一日の見聞ではないのである。何日も何カ月も、何年間も修行僧は眺めとおしたのである。恒星や惑星が移動している事実を知った。接近しようとしては離れ、離反しようとしては近ずいてくる。

「仲が好さそうで、仲が悪い。憎しみ合っているようで、すぐに愛し合う」

「まるで人間みたいだな」

「そうではない。人間が、その星たちみたいなのだ。なぜなら星たちの方が遙かに人間より巨大だからだ。山上から人間は見えないが、星や月は見える」

「人間が生きているとは、そのことか」

「そうだ。離れたり近づいたり、愛したり憎んだり……これが生きている証かしだ。しかもだな、このばらばらに生きている星どもが、何か一点、中心に顔を向けているのだ」「中心に向って顔を向けているのか」

「そうだ。時々落ちてゆく奴もあるが、殆んどが毎晩、同じ場所で輝いている。これは

中心に向って光りを放とうとするのか、あるいは中心から発光してくるものを受けとめて輝いているのだろうか」

「仏だ。阿弥陀仏の光明とは、それなのだ。中心点から輝き出る巨大な光り、無量光というのが、それなのだ」

「釈尊は、それに気づいていらしたんだろうか。ご存じだったのだろうか」

「もちろんご存じだ。気づいていらしたからこそ、阿弥陀仏の救いの教えをわれわれに遺してゆかれたんだ。釈尊ご自身が、阿弥陀仏の光明に洗われて救われることをお信じになって」

沙漠でくり返された夜と昼。サビヤも紅衣の修行僧も倦むことを知らなかった。語り続け、語り明かした。

すでに沙漠や草原は消え、道はけわしい登り勾配になった。左右から断崖が迫ってきて、眼下を急流が走っている。バーミヤンの都城は近い。

修行僧は往還に馴れたこの谷添いの道を、足取りも軽く進んでゆく。山駱駝はサビヤにゆずり渡してしまった。少年をその背にのせ、自分は手綱を引く。

ついに大石仏が見えてきた。断崖にきざみこまれた巨人型の仏像。左右にはおびたしい岩窟がうがたれている。

「この石仏をきざんだ連中も仏とは何たるかを知っていたようだ」

修行僧は見馴れたはずの石仏を、あらためてふり仰いで安堵の咳きを洩した。

「それはどういうことか」

「じつは黄金の大雪山に暮して空を眺めながら、いつもこの点が心配だったのだ」

「どこで、それがわかるんだね」

サビヤは問いかえした。

「どの顔も夜空の星、そのものだからだ。人間の顔を拡大したのではない。限りなく巨大な星たちの顔を縮小したのが、この石仏だった」

と言われてもサビヤはかんじんの星の顔を知らないのである。「観無量寿経」の「雑想観」で限らない巨容の阿弥陀仏の「真身」がミニ化された仏像と書くまでに、少年サビヤはなお長い歳月をバーミヤンの石仏と取り組まねばならなかった。

「わたしの窟房へゆこう」

やがて紅衣の修行僧は、断崖を掻き分けるようにして岩壁に削られた巖道を登りはじめた。

「未だ貴僧の名前を聞いていなかった。わたしはサビヤ」

「名前など、どうでもいいだろう。それにわたしはまた、じきに此処を去ってゆく」

「じきに去るのか。こんどは何処へ」

「黄金の大雪山へ引き返す。この石仏をじっくり見直したら、もう一度あの山上で星たちの顔を確認してきたい」

「また五年か」

「さあ何年になるか」

少年サビヤとこの修行僧との窟房における生活が十数日続いた。修行僧は窟房で所有しているすべての物品をサビヤに与えた。たいへんな物持ちでもあった。

とりわけサビヤを悦ばせたのは、経典を書きつける羊皮紙だった。たくわえているのではなく、修行僧がどこから調達してきてくれたのである。

ある日、サビヤは修行僧とバーミヤンの町へいった。町と言っても、農家の集落がその台地上にこそそと寄り集っているだけである。その奥にそびえる山稜の王城だけが豪壮美を誇っている。

一人の老農夫とすれちがったとき、恭々しく拝聴した彼の口から、

「王子さま——」

という言葉が洩れたような気がした。

サビヤはその点を真剣に問いつめたが、修行僧は首を振るばかりで、相手にしなかった。

もしも彼が王子だとしたら、カシユガルへ置き去りにしてきた駱駝夫人とどういうつながりなのであろうか。兄妹か。あるいは許婚でもあったのか。

だが、それ以上たしかめることは出来なかった。その翌日、すでに窟房から修行僧の姿はかき消えていたのである。

少年サビヤはこの窟房で老いた、と伝えられる。老いるまでの明け暮れを、大石仏をふり仰ぎながら讃嘆の絶唱をくり返しつつ「無量寿経」を、より文学化し、より哲学化し、さらに信仰のぎりぎりへまで昇華させた「経典」を書き綴ったと言われる。かくて「観無量寿経」は成立した。

善導大師はこの「観無量寿経」をどれだけくり返し味読したことであろうか。そして、心魂をくだいた注釈書「観経疏」を完成させた。その結びのなかで善導は切望した。

——某、いまこの観経の要義を摘出し、古

今の説を楷定、整理す。もし三世の諸仏、釈迦仏、阿弥陀仏など、大悲の願意をお与え下さるならば、夢の中でもこの虚空世界の隅々に至る諸相（すがた）を見せしめ給え。

善導はすぐにその晩、夢を見た。その靈夢のなかでひとりの人物が現れたのである。それも、

——たちまち一人、白き駱駝に乗りて、来たり進むを見る。その人は言葉をかけてくれた。「師はまさに努力して、この業を達成した。必ず決定往生は疑いない。だから退転、立ち止まることなかれ！」云々。

この夢告者が釈迦牟尼世尊その人であったことは言うまでもない。白い駱駝の背に揺られている釈尊だったのである。

（Ⅱ前章・おわりⅡ つづく）

(新)
(刊)

『浄土宗のおつとめ——日常勤行式——』

著者 大正大学教授・文博
真 野 龍 海

B 6判 一〇〇頁 定価六五〇円 (〒二五〇円)

〔五十部以上二割引定価五二〇円 千無料〕

◎平易にかつ丁寧な解説がほどこされた日常勤行式のお話。日々の信仰生活のおつとめに、全二十三節からなるやさしい解説文がお役に立ちます。著者の真摯な人生論としても、また広くおすすめしたい好著です。

(発売) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会

電話(〇三) 二六二―五九四四

振替(東京) 八一八二一八七

第五十一卷 三月号

昭和十年五月二十日

(第三種郵便物認可)

毎月一回一日発行

昭和六十年二月二十五日印刷 昭和六十年三月一日発行

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 二、枚数 四百字用紙八枚程度
- 三、締切 毎月五日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十一巻 三月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和六十年二月二十五日 印刷
昭和六十年三月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷所 長谷川印刷（株）

東京都千代田区飯田橋一―十一―六
発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番
振替東京八一八二一八七番